

血友病性関節症の進展に対する装具の予防効果

—特に抑制物質陽性例を中心として—

神奈川県立こども医療センター
整形外科 井 沢 淑 郎

われわれは、従来、小児の血友病性関節症に対して各種の装具療法を行い、みるべき効果を挙げて来た。しかし、高度の骨変化を伴った慢性例では、必ずしも満足すべき成績は得られていない。そこで、装具によって関節症の進展をどの程度防止し得るか、また、特に近年抗血友病剤の著しい開発と普及によって漸増傾向のある抑制物質陽性例に対して、装具は有効であるか否かなどについて検討を加えた。

1. 抑制物質陰性の初期例に対する効果

Grade I及びIIの関節症を有する8例、8関節(LLB3、SLB3、EB2)では、装具装着前(綴着時年齢:平均9才)の月平均2.3回の出血頻度が、装着後(平均装着期間:23.7カ月)には0.4回、すなわち2.5カ月に1回に減少した。止血効果が不十分であった2例では、X線所見もやや進行したが、他は不変であった。

2. 抑制物質陽性例に対する効果(表)

抑制物質陽性の6例、7関節(LLB2、SLB5)では、装具装着前(装着時年齢:平均6才)の月平均2.9回の出血頻度は、装着後(現在までの装着期間:平均17.1カ月)には0.1回すなわち10カ月に1回と著減した。個々の例では、装具装着以降1回も出血のないもの3関節、装着後3カ月目、9カ月目及び16カ月目より出血のないもの各1関節であった。しかし、1関節では出血頻度は減少したものの、装着後20カ月の現在もなお完全な止血が得られていない。X線所見では、この例及びX線学的follow 未了の1例を除いて、最変化の増悪はみられていない。

以上の如く、抑制物質の有無に拘らず、装具療法の止血効果はほぼ全例にみられ、また、X線所見よりみた関節症の進行防止は、14関節中11関節(78.6%)に得られた。特に、抑制物質陽性例に対する予防効果は注目すべき、装具療法の良い適応であり、また、これら患児のリハビリテーションの上に曙光を投げかけるものと思われる。

抑制物質陽性例に対する装具療法

No	氏名	型	装着時 年齢(才)	罹患 関節	装着の 種類	装着 期間(月)	出血頻度		X線像分類	
							前(回/月)	後(回/月)	前	後
1.	N.S.	A	10	Rt.K.	LLB	18	4	0	ⅢB	ⅢB
2.	S.Y.	A	5	Lt.K.	LLB	13	4	0	I	?
3.	K.M.	A	7	Rt.A.	SLB	20	2	0	ⅢA	ⅢA
			7	Lt.A.	SLB	20	0.01 (2x/7y)	0	ⅢA	ⅢA
4.	Y.H.	A	5	Rt.A.	SLB	13	4	0	I	I
5.	K.S.	B	6	Lt.A.	SLB	16	4	0	I	I
6.	H.D.	B	3	Lt.A.	SLB	20	2	0.6 (10x/17M)	I	ⅢA

(注) K…膝関節, A…足関節

血友病A患者の各種出血症状に対する
第Ⅷ因子濃縮剤の高単位輸注効果

奈良県立医科大学小児科

福 井 弘
吉 岡 章
三 上 貞 昭
高 瀬 俊 夫
藤 村 吉 博
三 村 良 明

「目 的」

血友病Aの各種出血症状に対し、第Ⅷ因子濃縮剤を投与して血中第Ⅷ因子活性を正常人と同様のレベルに上昇、維持せしめた場合の止血効果について検討した。

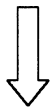
「対象及び方法」

血友病A 19例の筋血腫、消化管出血、血尿、抜歯、創出血などに第Ⅷ因子濃縮剤(Conco-



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



われわれは、従来、小児の血友病性関節症に対して各種の装具療法を行い、みるべき効果を挙げて来た。しかし、高度の骨変化を伴った慢性例では、必ずしも満足すべき成績は得られていない。そこで、装具によって関節症の進展をどの程度防止し得るか、また、特に近年抗血友病製剤の著しい開発と普及によって漸増傾向のある抑制物質陽性例に対して、装具は有効であるか否かなどについて検討を加えた。